

入  
選

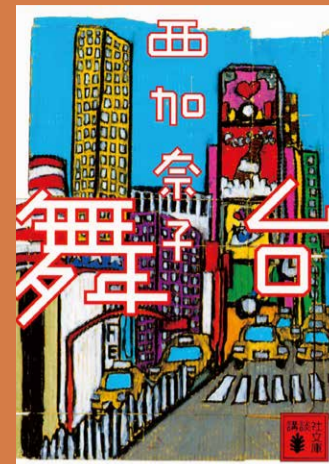
— 高校生の部 —

## 「ありのままを演じる」

小林千優さん

推し本：『舞台』

著：西加奈子

推したい相手：何か無理をして生きているな、  
と感じている人に

## 「ありのままを演じる」 小林千優

大好きな西加奈子さん。物語はいつも優しい。しかし、この「舞台」は、いつ救いがあるのだと、苦しい想いで読み進めなければならなかった。でも、やはり優しかった。救われる人がたくさんいるはずだ。私も優しい目線を持つと、そう思えた。温かい本だ。何か無理をして生きてるな、と感じている人に推したい。自分の悩みなんてちっぽけだと思っている人にも。主人公「葉太」は、徹底的に人の目を気にして生きている。調子に乗り、痛い目に遭っても、めげない友人達に驚嘆する。「友人たちのようになれたら楽なのにと強く願いながら、絶対になるまい、そう決意するのだった。」葉太は感受性が強い。だから外敵に弱い。アルマジロが身を守るため、体毛の一部を鎧に変化させたように、葉太の体には鬣がついている（と感じている）。「外界の刺激はまずその鬣に阻まれて皮膚自体になかなか到達できない。ただいざ入ってしまったら払っても揺すっても鬣に絡まってなかなか出て行かない。」私にもある。失敗した事や恥ずかしかった事をふいに思い出し「うわああ」と叫びたくなる。腹が立ったのに、何も言い返せなかった事。それを思い出すたびに、湿った怒りがしつこく湧き上がってくる。忘れた感情程、体内に残る。ふとした時に、仕舞ったはずの抽斗からヌツと顔をだす。人はそういう負の感情をやり過ごす術を学んでいく。それが上手くできる人は器用に生きているように見える。その器用さは「演技」とも言える。演じていることが見えた時、それを偽善、もしくはあざとい、などという言葉でマイナスの意味をつけたがる。人は「ありのまま」を良しとし、欲する。葉太が本当に恐れているのは、演じていることが見抜かれる事だ。「人間失格」の主人公、草蔵の道化をわざとだに見抜いた竹一を、悪魔だと思う。その目を恐れている。初めてその目を向けられたのは父からだ。その蔑視に耐えられず、過剰なまでに人の目を気にするようになった。父は著名な小説家で、「こう見て欲しい」という自分を演じ続ける。葉太にとってはすべてがしゃらくさかった。しかし、遺品の中に「地球の歩き方～ニューヨーク～」を見つける。しゃらくさかったはずの父の真をみてしまったようで、「最後まで嫌いなままでいさせて欲しかった。」と思

う。そして、そのガイドブックを手に、葉太はニューヨークへと旅立つが、初日に盗難に遭い、無一文となる。浮かれているからだ、恥ずかしい、そう思い、助けを求めることができなかった。結局、日本にいる母と、ニューヨークにいる父の友人の助けで、日本行きの飛行機に乗り込むのだった。職を転々とした挙げ句、29歳無職。旅の武勇伝を語れるような友人も、いつしかいなくなっていた。自分はなんて情けない人間なんだ、のん気で駄目なボンボンなんだと葉太は思う。「俺は、とんでもない恥知らずだ。」葉太はずっとずっと苦しかったのだ。きっとこの世では誰もが、自分なりの舞台に立って、何かしら演じているのではないか。お好みの「ありのまま」さえも演じていたりして。それは自分の心を保つためであったり、相手を思いやっただけのことだったりする。演じていること自体が悪い訳ではない。だから、それが見えたとしても、分かっているよという風に、優しい気持ちでいれば良いのではないか。素晴らしい演技には乗ってやり、拍手したって良いくらいだ。自分の舞台は自分が観客でもある。せっかくなら、自分が心地良くいられる舞台をつくりたい。簡単に言うと、無理をしないという事だ。私は、入学当初キャラを作りすぎ、案の定すぐに辛くなった。笑いながら首が締まっていく状況だ。その場合、台本が間違っている即刻書換えだ。葉太は裕福な家庭で育ち、顔立ちも良い。一見、苦しみとは無縁のように見えると思う。しかし、苦しさや辛さは人それぞれで、悩みに大きいも小さいもない。日々はなんとなく感じている負荷の原因を知るのは、とても大切なことだ。そして辛いときは楽な方を選んだっていい。葉太が自分の苦しみに向き合い、助けを求めることができたとき、「初めて父に褒められた気がした。」葉太の体の壁が少しずつなくなっていく様子が浮かんだ。良かった。私はここでやっと大きく息を吐いた。涙が出た。この本は葉太がずっともがき苦しむ。読んでいて苦しかった。葉太は私であり、あなただ。ぜひ読んで欲しい。